Sr. M. Kobayaci
Caixa 2-z

No 151

SEMANARIO DE SÃO PAULO

19 DE SETEMBRO DE 1924

聖州新報

社主兼編輯人 香山六郎
発行所 バウル市ピオタン街 聖州新報社

ROGRO KOYAMA
REDACTOR DE SEMANARIO DE S. PAULO
CAIXA POSTAL 58
RUA PIOTAN
BAURU
ESTADO DE S. PAULO
BRAZIL

雑談

●革命軍が負けてしまひもせず、官軍が勝てしまひもせず、世論は多分リベルダデの近況に業を煮て居る連中が伯人間外人間にも可成に多い。

ノロエステ線の客車の襟では何うかすると論客がソコかもコヽから頭を伸ばしたり捻り枉たりして口角泡を飛ばす論談旅はよいが一等室のお客様連煙草を一喫してはペッ〳〵とアタリ構はず唾や唾を吐き散らす。

「唾棄する」とは此事だろう。十中の九分通り官軍側が唾棄されてる。

●去る八月三十日午后四時アラクワラ線からパウリスタ線イチラピーナ驛へと来た私はバウル行の汽車が出なくなったので同驛の町に泊した。

イチラピーナ驛町にはペンソンが二軒とホテルが一軒しかない。

町の廣場お寺の丑寅に一軒の傾いた角屋敷がある。歪んだ窓から白首が一ツ私を見て二ツ笑った。皺だらけの顔で。

イチラピーナは高原だ、海拔七百メートルからの。

ここの驛長さんは昨年迫、日本語上手に話すペルシオ、アマラルデ、ソウザと呼ぶ人だったが、今はリオグラロ驛長さで居る。ペルシオ君がここに居た頃は此驛通過の日本人等の旅の淋い情緒が驛長さんの日本語でよく暖められ慰められたものであったが、イチラピーナ驛はモーから日本人には慌しく冷たくなった。聖日畫拾二時、私はイチラピーナ廣場のホテルの窓から眺めて高くもない二階建のお寺の塔を眺めていたら、チーンクヽと響いて来た時計の鳴に私はフト私の過去の記憶に……

全く不思議なる記憶に……祖国震災を深く幻想した……全く今日はあれから一年経つ九月一日だ。今十二時だ……が私の血はその記憶から、幻想から感激をうけなかった。

●力行會長永田氏再来信濃や海外中央其他主地組合の新殖民地が出来る噂をきいたノロエステ線の在住者間は永田氏が出歳で評判甚だよかった。

処がだ……此度は永田氏何ったものか初来の如くノロエステ線殖民者旧知と親しく顔合せも錦々出来、昨今年鑑社長やバルサンピーラの奥地三千アルケーレスを買入れてしまったとか……全く結構な話である筈だが……ノロエステ旧知の仲の或るものは出迎のお挨拶位はするべく豫期していた処……又永田氏にお話したい山は何処何処と位案じて忘れたに……モー……ルサンピーラに極まったらしいと聞いたノロエステ旧知の或者は妙な顔を見合せて居る。それもノロエステ先輩連の豫期した現今の殖民第一等地第二等地の孰れかであればよかったに、それもはづれたからと。又参謀なり顧問なりがノロエステ先輩連と仲悪のお役人であり、シヤキリシヤンである処からもと。

将来相互補助で選ぶ方はなかったが、イチラピーナ驛はモーから同一地域の殖民同志、永田氏にとっては旧知の間柄であり、ながら、リベルダデの日本人會もあり、ノロエステ先輩連の豫期した現今の殖民第一等地第二等地の孰れかであればよかったに、それもはづれたからと。

又参謀なり顧問なりがノロエステ先輩連と仲悪のお役人であり、シヤキリシヤンである処からもと。

将来相互補助で選ぶ方はなかったが、イチラピーナ驛はモーから同一地域の殖民同志、永田氏にとっては旧知の間柄であり、ながら、リベルダデの日本人會もあり、ノロエステ先輩連の豫期した現今の殖民第一等地第二等地の孰れかであればよかったに、それもはづれたからと。

又参謀なり顧問なりがノロエステ先輩連と仲悪のお役人であり、シヤキリシヤンである処からもと。

●或る晩蒸し暑いのでプラリと社を出てバウルノロエステ驛前の空地場をブラ〳〵してるに三四人の官兵と一人の平民から成る若い婦人が町の方から急ぎ驛さして砂の上を泳ぎつゝ行く。

注意して見ると兵隊さんはいづれも両手に新聞紙の大包をさげて居る。

そうして前なる婦人の肩には兵隊さんの銃が一挺軽るくと槍がれて居る。

婦人が三歩先に歩いてる兵隊さんがそれにつゞく……

アンダ アントニオ……と婦人は兵士を急き立てゝ居る。

見れば日本内地であったら神聖なる兵器を婦人に持たせて怪しからん……と厳重に抗議すべきだ上等兵にでもあったら、頬ペタのセツハツも撲ぐられる処だろうに。

アンダ アントニオ……もチト様子が違ふと可笑しくなった。日本人のみが味はへるおかしみかも知れぬ。

帖の手前、一寸寄ってほしかったと云ふ気分がノロエステ先輩連間に流れると……成程ノロエステ古顔連もモー喰へる時代に入った。

永田氏の喰へる時代も来てる……喰へる人間はどうかすると妙な勝手な真似をお互ひにするものだ。

一般の精練を要すれば。

●春風號来る日本郵船社船

日本一週飛行航程

區間	距離	飛行時間
神戸		十時間五分
長崎	七〇〇キロ	二時間
鹿児島	二五〇	四時 廿分
福岡	七三〇	三時十五分
小倉	二〇〇	四時十八分
福岡	二五〇	四時間
佐賀	二〇〇	一時 五十分
熊本	二五〇	三時間十五分
大阪	四三五	
名古屋	四三〇	
東京	五〇〇	
仙台	五五〇	
青森	四八〇	
函館	四三九五キロメートル	

全航程四三九五キロメートル
飛行時間三三時間五十三分
時間平均速度百五十キロメートル

●盟主たらんとせば……

日本若しアジア民族の上海大学アジア協会講演会で茂木一郎氏の苦言

田相氏の演説

……今日の祝く 日支両国の感情の悪化した原因が那辺……

●婦人が町の方から急ぎ驛さして砂の上を泳ぎつゝ行く。

注意して見ると兵隊さんは……

●或る晩蒸し暑いのでプラリと社を出てバウルノロエステ驛前の空地場をブラ〳〵してるに三四人の官兵と一人の平民から成る若い婦人が町の方から急ぎ驛さして砂の上を泳ぎつゝ行く。

注意して見ると兵隊さんは……

●一般の精練を要すれば。

平野殖民地小學校には 教育補助金が 下りなかったそうな

去の十四日ノロエステ線ペンナ驛平野殖民地から邦人團の教育係の田中先生と藤原、藤澤の三氏が來馬された。

そうして先達て領事館から申請書を出せと通告に接したので當時出しておいた教育補助金が今にさがりませぬから、又何とも未だに通知返事に接しませぬので實は領事館に聞合せに來ました處

平野殖民地の申請書中「校舍もあり教員住宅もありと書いてあったので多羅間領事は補助金を下附せない事になって居ると云はれました。

勿論申請書中「改築と増築の必要文あり」とは確に文句を入れてありました旨に覺えて居りますが

大正十二年度分と十三年度分との教育補助金下附は平野殖民地には呉れぬそうです。

多羅間領事さんは平野殖民地の學校建物がどんなもので出來て居るか教員住宅がどんな家か充分實地御承知の筈です。

又殖民者一同がどの位の懐具合であり遺繰算段であるかも殖民地領事として良い程御存じの方へ云つてやったかでせうに。申請書の文句がどうとそれを理由に兒童教育補助金が小學校として最もたい歴史と財濟に苦しみ通して來た平野殖民地小學校に下附なかった事は殖民者一同の全く意外とする處です。

申請書を出せと通告あったれば こそ出したのです。

それに充分の返信時日もありながら下附するとも否とも返信せず、ホッタラかされた今日來てみれば右の始末です。

おまけに多羅間領事の言葉が氣に食いません。

補助金は誰方が平野殖民の名譽を…… 迎にしてまでも……

腹が空いて居ても親の飯を喰はぬが子供等の名譽でせうか。

他の飯を喰はぬのなら名譽かも知しませんが。

殖民者一同が祀り愛しに如く信奉も今ではソウ思ひます。

是には故松村總領事時代の例のセコンドス問題が妙に出て居らぬとはまんざら思ませぬ。

そうとれば多羅間領事なんて公私の關係を混同して居るんじゃないでしょうかね。

それでなければ、どうか親の子供だったが平野殖民地小學校よりも今、暦を急に改築や増築を世話は遠慮なく…… 位

したいと思って居るから……

然るべきに貴はぬ方が名望の名譽なんて、何と云ふ言葉でそうして來年度は俺が骨折て貰つてやってもいうつて。

二度目に行った時平野殖民地から出した申請書を見せて呉れと頼みましたら、モー來年度の方へ云つてやったかういうじゃないかって話でした。

グワイサ驛の昨年出來た彼の小學校に対下附金が下りてます。

●三百二十日の大暴風（十三日）

日本南海岸一帯大暴風雨並びに各地の家屋倒潰し農作物の被害甚大なりと。東京市は颱風と共に大降雨あり、家屋四千六百戸は浸水溺死者百人を出すべしと。

●支那内乱と日本の對支關係

支那排外運動は益々猛烈に積極を極めつつあるものの如し。その沈静及国民撫恤に各国出兵の要なき旨と林大使は声明せるも各国代表者はその要なしと声明せるも各国代表者はその要なしと